

ブリコラージュ 20 周年記念

三好春樹 ロングインタビュー

この秋から『ブリコラージュ』は 20 年目に突入する。あくまでも三好春樹の個人誌というスタンスを貫き、直接購読でありながらあえて会員制度をとらず、広告もなく（最近、指名制を導入した）、消費税と送料込みで 500 円という廉価を維持してきた。こんな不思議な雑誌が、20 年前にどうして生まれたのか。そして、20 年の間にどのような役割を果たしてきたのか。当事者である三好春樹が『ブリコラージュ』にかけた思いを聞いた。

インタビュー ● 東田 勉

介護という独自の領域を 明らかにし、守ってきた 『ブリコラージュ』の 20 年



すべては「生活リハビリ講座」 から始まった

「私が九州リハビリテーション大学校を卒業し、以前働いていた特養ホームにPT（理学療法士）として戻ったのは、31歳の時です。時を同じくして1982年に老人保健法が施行され、介護の世界には大きな変化が巻き起こりました。老人保健法は、慢性疾患の患者さん（その多くは脳卒中による片マヒ者）の長期入院をや

め、地域で行う機能訓練教室で支えていこうという法律です。国はこの事業を全国の保健師（当時の言葉では保健婦）に担わせようとしていました。

保健師たちはそれまで結核と精神障害者と母子保健が主な仕事内容だったので、老人のことは何も知りません。困った保健師たちは特養ホームなら同じような生活の場だからと見当をつけて、PTである私のところへ講演や訪問の依頼に来たのです。





20年前のなつかしいブリコラージュたち
 バックナンバーをすべて見るができます。
 ブリコホームページにアクセスしてください。http://www.nanasha.net/

それらの依頼に応えるようになった私は、全国規模で始まった機能訓練教室が、地域ケアとかりハビリとか言いながら病院と同じことを始めようとしているのを見て、これではいけないと思いました。家で寝たきりになっている老人たちは、身体機能に問題があるから寝たきりになったのではないのです。主体が崩壊したから寝たきりになってしまったのです。マヒした手足でどうやって生きていくのかを考えないといけないのに、誰もそのことがわかっていませんでした。これ以上治ることのない手足の訓練ばかりがあちこちで行われ始めたのです。

老人の崩壊した主体を立て直す方法を教えるには、自分で講座を開かなければならない、と思ってフリーになりました。1985年のことです。3月に特養ホームを辞めて、秋に最初の講座を立ち上げました」

介護施設は特養ホームだけでデイサービスなんて1か所もない時代。ヘルパーは独居老人の家にしか行かず、それも家事援助で介護はなかったというから、地域で寝たきり老人の訪問を始めた保健師の戸惑いは大きかっただろう。

当時は介護に関する研修などは少なかったので、三好さんが始めた「生活リハビリ講座」は

大きな反響を呼んだ。広島市内の自宅を兼事務所にして「生活とリハビリ研究所」を開き、手づくりのちらしをまいて受講生を集めた。

「まず、広島と東京に50人くらい入る会場を借りました。講座のちらしを1枚ずつ入れた封筒に手書きで施設の住所を書き、特養と市町村の保健婦さん宛てに郵送したのです。あっという間に満杯になって、広島と東京を2教室に増やし、急遽大阪会場を1教室加えました。初年度に5教室でスタートできたことが、立ち上げを成功させた理由だと思います。

それにしても、ちらし1枚でよく人が来てくれたものです。大学の先生でもなく、本も出していない無名のPTなのに……。それだけ、介護の専門家がいなかったということでしょう。

第1期生には、東京会場に参加してきた言語聴覚士の遠藤尚志さん、“参加者を集めてやるからちらしを100枚送れ”と岡山から電話をかけてきた大熊正喜さん（現在岡山県の老健チーフマネージャー）、介護用品を扱う多比良商会の故後藤郁子さん、その紹介で福井から大阪会場にきた坂本宗久さん（生活介護研究所代表）らがいきました」

受講者通信だった『ブリコラージュ』

「生活リハビリ講座」を何年か続けるうちに、修了生がバラバラになっていくのはもったないと、受講者通信を送り始めた。B4用紙に4枚くらい書いたものをコピーして郵送したのだ。その通信の名称が『ブリコラージュ』だった。

「ブリコラージュはフランスの哲学者クロード・レヴィ＝ストロースの『野生の思考』という本に出ていた言葉です。“手づくり”という意味なのですが、大量生産の近代的で科学的な方式が進んでいて、手づくりが遅れているという考えに対して、レヴィ＝ストロースは手づくりのほうが人間的だし、近代を超える要素もっているのだと主張しました。この本に出合った時20代の後半だった私は、特養の宿直の夜に読んで興奮のために眠れなくなったのを覚えています。

工業社会ではブリコラージュはホビーの世界にしか残っていないと彼は書いているのです

が、介護の世界にはまだ健在です。私はそこで、介護は医療に対してコンプレックスをもつ必要はないのだと確信しました。科学にもデータにもならず、前近代的だと言われた介護ですが、手づくりで何が悪い、と開き直ればいいのだとわかったのです。

その日から、いつか自分が雑誌を出す時がきたら、『ブリコラージュ』という名前にしようと決めていました」

その後、修了生の数も多くなったので、定期購読してもらうことにして、1989年6月に創刊準備号を制作した。16ページの小冊子だった。

「それを見た筒井書房の社長、筒井眞六さんが、お金を取るのならもう少し見栄えを考えなさいということで、デザイナーの石原雅彦さんを紹介してくれました。創刊号は、1989年9月に出た秋号で、季刊でのスタートでした。1994年の7月から月刊化し、通巻27号目から七七舎に制作をお願いしています。それまでは、私がそれこそ手づくりで全部つくっていま

私とブリコ

三好さん、ありがとう

三好春樹さんの「生活リハビリ講座」がなかったら、その後の私の仕事の大部分もなかったことと思う。「失語症ライブ」「言語リハビリ教室」「失語症者の国際交流のための海外車椅子ツアー」「失語症デイ」などの活動は、いずれも25年前に三好さんの講座で聞いた「ベッドの足を切れ」という話のインパクトから、玉突きのようにして生まれてきた。

当時、私は610床という巨大な特養ホームにリハビリ・スタッフの中のたった一人の言語聴覚士(ST)として転勤になったばかりであった。途方に暮れていたところへ、所内の回覧で三好さんの講座の案内を目にして早速出かけていった。そして、寝ているお年寄りを見たらまず膝からかかとまでの長さを計って、その長さに合わせてベッドの高さを調節するという話に深く納得したのであった。要するに、寝ている人を見たら起きてもらう、そこからお年寄りの主体的な生活が始まる、ということで生活の環境づくりに職員の役割がある、という発見であった。介護とは「介入によって護る」こと、そして護るとは単に機能が維持されることではなく、その機能が「意味あるもの」として花開くことだと、最近ますます思う。



遠藤尚志 (言語聴覚士)

した。

創刊号は300部程度だったかなあ。すぐに1000部を超え、その後はずっと5000部台で安定しています」

読者は圧倒的に介護職が多い。ほとんどが個人での購読だ。驚いたことに、20年間一度も発行が遅れたことがない。次回の特集で何を取り上げるかもすぐに決まるという。苦労話を期待したが、当てが外れてしまった。そこで、個人誌にこだわる理由を聞いた。

「編集委員を何人か立てれば楽にはなるでしょうが、責任が分散されます。私はあくまでも、ひとりで責任を負いたかった。自分がおもしろくないものは載せないためです。受験対策の特集などで稼ぐつもりもない。なぜ組織化しないのか、とよく聞かれますが、会員制にした支部をつくったりすれば、組織を維持することが目的になってしまいます。組織は手段なのですが、主客転倒してしまう。そんな例をいくつも見てきましたから、それだけは止めようと思いました。

単なる読者なので、通り過ぎていく人がたくさん出ます。5000人の読者がいて、定期購読

者の通し番号は3万台ですから、20年間で6回は読者が入れ替わったことになります。もったいないとは思いません。人生のどこかでブリコにはまった人があちこちにおいて、それがその人の糧になっていればいいのです」

第1回「オムツ外し学会」のインパクト

『ブリコラージュ』創刊号の特集は、「全国に28もある、老人ケア研究会一覧表」「老人ケア研のつくり方」だった。生活リハビリに詳しい人なら「へえ、創刊号の時に28もあったのか」と思うかもしれないが、当時の事情を知らない僕は、「老人ケア研究会」とは何かを聞かなくてはならない。すると三好さんの話は「オムツ外し学会」へと向かうのだった。

「講座を何年もやっていくうちに、一度みんなで集まろうという話になったのです。そこで1988年10月に広島で最初の“オムツ外し学会”を開きました。メインタイトルが“生活リハビリ実践報告会”、サブタイトルが“オムツ外し学会”だったのを、直前に入れ替えたのです。

私とブリコ

とびぬけておもしろいことが起こった

三好春樹さんの名前を初めて知ったのは『老人福祉』（全社協刊）という雑誌に掲載されていた実践報告だったと思う。他にも実践報告は載っていたのだけど、三好さんの報告はとびぬけておもしろかった……たしか同名半盲の人の事例で、介護者は道具であることを主張していたレポートだったと記憶しています。彼は、そのレポートの中ですでに「ブリコラージュ」という言葉を使っていたよ。

その後、彼が「ブリコラージュ」という受講者通信を赤字で出しているのを知って、「売り物にしようよ」と提案しました。おれは商人だから、これは伸びて、主人公になると感じたんだよ。

とびぬけておもしろい新しい何かが起こり始めていると思っていたけど、実際にそうだったね。



筒井眞六（筒井書房元社長）

「第三回日本オムツ外し学会」(十一月二十一日)二
十三日・広島市 は想像を
超える会となった。

すでに、参加者の自発性
だけで運営する『学会』と
しては、その規模が限界を
超えてしまったようだ。

自分のやっていること思
いをうまく伝えてくれた。
一方、寮母やホームヘル
パーの発表は、制限時間を
越えて二十分もしゃべって

人々で登壇。違う職種同士が
いっしょに発表するといっ
つもの学会らしいが、内
容はもっと学会にふさわし
いものだった。

ない市町村が多い。ヘルパ
ー増員の目的は、こうした
『寝たきりケアゼロ』を美
踐するためののである。

を会場で販売したり、カン
パを訴えたり大忙しだった
が、発表のほうは、二十分
も話して、また、なぜ施設
を辞めたかということもま

前後祭は会場に参加者が
入り切れず、開始の五分前
に急拠二つの会場に分かれ
てもらい、私の講義と熊本
老人ケア研究会の寸劇「老
人の排泄ケアはそれぞれ
二回公演することになって
しまった。

すこかったのは参加者数
だけではない。北北海道
から南は沖縄まで、自費で
な報告が会場を沸かせた。
それはあたたか、「現場の想
浴サービス」が蔓延してい

寝たきりゼロ」が叫ば
れながら、上を向いた姿勢
で入浴させる。寝たきり入
浴サービスが蔓延してい

福岡市からやってきた下
村恵美子さん(三人娘?)
は元特養ホームの寮母。管
理的な施設ケアに飽き足ら
ず、脱サラして民間のデ

この熱意で、改装資金達
成まであと一歩だといっ
こんな面白い発表をせひ
他の人たちにも紹介した
い、と五月十六日(日)、東
京で開かれる「生活リハビ
リクラブ五周年記念・寝た
きりケアゼロ作戦セミナー」
での出演を依頼交渉中。

を辞めたかということもま
でしかいかず、最後の全体
討論で続きを話すという始
末。表現したいことがいっ
ぱいあるのだ。

「現場の思い」あふれたオムツ外し学会

そのうえ、壇上にまで座
つてもう一つもまだ廊下に
人が溢れる始末。

び、その二つ二つの内容に
私は感激した。
今回の特徴は、PTやO
Tといった専門職が、入浴
ケアを始めとする老人介護
に関わっている報告が多か
ったことである。

い」が、とてもそんな学会
るなかで、家での入浴成功
が十一例、さらに、日曜ま
たという。
と云っても、施設を建て
る金もない。そこでお寺の
本堂をお借りして実践しな
がら、これまた寺の敷地内
の家の改造資金を集めてい
るといっ。

ホームヘルパーを増やせ
るという声は高いが、肝心の
何をするためにヘルパーを
増員するのが分かってい
ら現品カンパのあった衣料
研究所所長」

ホームヘルパーを増やせ
るという声は高いが、肝心の
何をするためにヘルパーを
増員するのが分かってい
ら現品カンパのあった衣料
研究所所長」

この学会でも、協力者が
企画まで。生活とリハビリ
研究研究所長」



三好 春樹

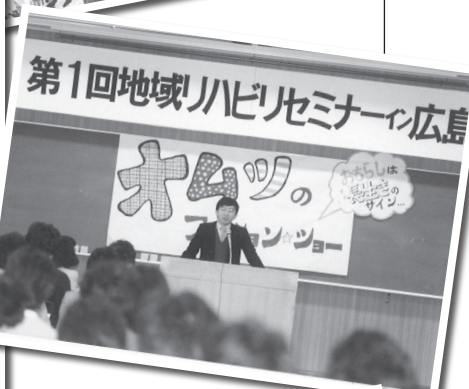
さすがに彼らの発表は、
十分という短い時間内に、
スライドやビデオを使い、

北海道の端野町のホーム
ヘルパーの山本さんは、同
町の保健婦の菊池さんと二

北海道の端野町のホーム
ヘルパーの山本さんは、同
町の保健婦の菊池さんと二

北海道の端野町のホーム
ヘルパーの山本さんは、同
町の保健婦の菊池さんと二

北海道の端野町のホーム
ヘルパーの山本さんは、同
町の保健婦の菊池さんと二



福祉週評

福祉週評

結果的には、それがよかったのだと思います。3会場用意しても席が足りず、当日4会場目をつくりましたが、それでも椅子が不足するほどの盛況でした。

学会と名づけたのは、医学の学会に対する皮肉です。呼びかけ人は私ひとり。大学の先生やジャーナリストは呼ばないことにして、現場からの実践報告のオンパレードにしました。“先生と呼ばれないとムツとする人お断り”というルールがあって、参加条件はそれだけです。前日から会場を開けて自由に展示発表できるスペースを設けたところ、模造紙や写真をペタペタ貼って、学園祭のようなノリで大勢の人が自分たちの実践を発表しました」

この時広島で知り合った人たちが自分の地域に帰って始めたのが、各地の「老人ケア研究会」

だった。“生活リハビリ講座”の修了生が中心となって、今でも各地で続けられている。一方、“オムツ外し学会”のほうは、その後2年に1度のペースで開催されるようになった。第2回には下村恵美子さんが登場し、特養ホームを辞めてこれから自分たちで手づくりのケアを始めるのだと発表している。

「オムツ外し学会」はその後何回も全国版が開かれたが、あまりにもたくさんの方が来るのでもう全国版は無理だということになり、今では各地で勝手に行う形式に変わった。

“生活リハビリ講座”は“新しい介護セミナー”とスタイルを変えて、会場も札幌、旭川、仙台、東京、横浜、名古屋、大阪、それに九州と、全部で10教室以上に増えている。

私とブリコ

ブリコをきっかけに広がった輪

障害者の施設から、いきなり特養ホーム開設に関わることになり、途方に暮れていた時に出会ったのが、福祉新聞に載っていた三好さんの文章でした。「これだ！」と感じた私はすぐ生活リハ研に電話したのですが、それがなんと「オムツ外し学会」当日のことだったの

です。スタッフ募集の呼びかけをブリコに掲載してもらい、『介護覚え書』をテキストにして職員研修を始めました。三好さんから紹介された誠和園のお風呂を参考にして、施設のお風呂（露天風呂もあった！）をつくり、開所時には三好さんに来てもらいました。ブリコ27号の特集「お風呂が変わる お風呂を変える」でそのお風呂が紹介され、たくさんの方の見学者が訪れました。さらに、この特集の次のページに載っていたのが美瑛慈光園（北海道）の安部信一さんのレポート。ブリコをきっかけに、安部さんとの交流も始まりました。高齢者ケアに関わるその入口で三好さんとブリコに出会い、全国に仲間ができました。生活リハビリという考えが、ユニットケアの基礎をかたちづくれたのだと思います。

ブリコ27号「お風呂が変わるお風呂を変える」特集より



武田和典（ユニットケア研究会代表）

テキスト制作を通して 確立された介護観

このように講座が増えてくると、大切なのがテキストだ。講座を始めた頃の三好さんは著書がなかったので、手づくりのテキストを用いていた。1986年に三好さん最初の著書『老人の生活ケア』が医学書院から発行される。1989年には筒井書房から講演集『生活リハビリとは何か』が出た。

当時、介護の本はよく売れた。リハビリテーション医の竹内孝仁氏以外には排泄に注目する人もなく、介護の専門家と呼べる人がいなかった。そこでPTは訓練法を、看護師は安静看護を、介護と称して教えようとした。医者も保健師も社会福祉の先生も、新たに注目を集め始めた「介護」という領域を、自分たちの下請けや啓蒙の対象にしようとやっきになり、介護は異

業種の“草狩り場”にされようとしていた。

それに立ち向かったのが三好さんである。では、彼はどのような理論に基づいて、独自の介護論を切り開いたのだろうか。

「それ以前に十数年間続けられてきた特養ホームでの実践がありました。寮母たちは、誰に指導されたわけでもなく、目の前に困っている人がいるから放っておけなくて世話をしていました。老人たちは病院からオムツをつけて来ます。縛られていたから、目がトロンとしているのです。それがみんな元気になって、オムツも外れていくのを見ていましたから、これを何とか言葉で伝えることはできないだろうか試行錯誤しました。

病院になくて、特養にあるものは何かと考えると、相手の嫌がることはしない、ということに行き着きます。医療は科学だから、相手が嫌がったらどうしよう、という選択肢がありません。一方的にその人の運命を決めてしまう。そ

私とブリコ

あの時感じた予感は本物だった……

プリンセス・プリンセス 1989年の大ヒット曲「ダイヤモンド」が好きだ。「♪眠たくっても、嫌われても、年をとっても、やめられない」のところは今でもテレビCMで使われている。その後のサビの部分「♪ダイヤモンドだね。AH AH いくつかの場面、AH AH うまく言えないけど宝物だよ」今なら腰にぶら下げたデジカメで、ダイヤモンドのようにキラリと光る「宝物」の場面をカシャッとコレクションするのだが……。

三好さんとの初対面は 1985 年春頃、広島地域リハビリ研究会が竹内孝仁先生をお招きしたセミナー。竹内先生からは「褥創は体位交換では治らないよ」という当時としては目からウロコの衝撃的なお話を聞いた。そこで、三好さんが訪問リハビリのブリコラージュ的な(?) 実践報告をしたのを覚えている。その頃、僕は老人専門病院の現場で全国的にもまだ珍しかったデイケアの立ち上げを行っていた。

あの時実践報告をした人がフリーになって「生活リハビリ講座」を始めるということを後から知った。そして、同僚のPTに広島の講座に通ってもらったのだった。

「年をとってもやめられない」ことのひとつ、4歳年上の三好さんの姿を遠くから横目で見ながら、老人介護の現場に関わり続けたい。写真右の方は、「ヘルパー養成講座」の事務局を担当していた時に三好さんのビデオを見たそうです！…月日は確かに流れている。



大熊正喜 (岡山県・ライフタウンまび)

んな関係しかないところに何か月もいたらどうなるか、それはおかしくなります。

特養ホームでは相手が主人公ですから、相互的な関係になります。関係でつくられた主体の崩壊は、関係を使えば治せるのではないだろうか……。そこを突き詰めることで『関係障害論』という本が生まれました。1997年のことです」

書き終えた時にはホッとしたという。これで山を越えた。あとは下っていけばいいと思ったそう。これが本格的な教材の最初の1冊目なのだと、思ってもいなかった。雲母書房の茂木敏博氏に乗せられたわけでもないが、「生活リハビリ講座シリーズ」は、その後6冊まで刊行されている。それにしても『関係障害論』が最初の1冊というのが、いかにも三好さんらしい。

介護の世界は変わったか

『ブリコラージュ』を始めた20年前と比べて、

三好春樹の発言は驚くほど変わっていない。今も20年前と同じことを言い続けている。掃いて捨てるほどある介護のセミナー屋さんはどこも、「今、一番タイムリーなのはこれだ」と流行を追うことに忙しい。三好さんは、それを一切やらなかった。流行を追うと、結局信用を失うことがわかってきた。

この20年間、介護の世界はめまぐるしく変動した。制度が変わり、資格が変わり、施設が変わった。しかし、変わらないものもある。それは、老いや死だ。三好さんは、そのことを言い続けてきた。

「ようやく介護の世界にも光が当たるようになりました。それはいいのですが、近代の光を当ててしまっているのです。治るとかよくなるという幻想を語らなければ予算も付かないし、人も振り向かないというのはおかしい。いくら筋トレや脳トレをやっても、人間は最期は老いさらばえて死んでいきます。それを支えるのが

私とブリコ

明日に踏み出す勇気の後押しを

私が初めて「ブリコラージュ」に出会ったのは、まだ病院のデイケアに勤めていた頃なので約12年前。

会議室の書架にあった、バックナンバーと、三好さんの「老人の生活リハビリ」、誠和園の「寝たきり地獄はもういやじゃ」、医学書院の「いきいきジャーナル」。この出会いで私のその後の介護人生は決まったといっても過言ではありません。

当時のブリコは、表紙の写真からしてかなりアングラでした（失礼）。特に69号（1998年8・9月号）のたこ焼きを食べているお婆さんの表紙は大傑作！ まじめな表情なのにどこか滑稽。この写真こそ、まさにブリコらしさの真骨頂でしょう。

介護の雑誌と言えば、普通はマニュアルづくりにヒヤリハット、明けても暮れても情報開示と監査対策のネタばかりで、現場はますます老人から遠ざかるばかりです。お年寄りとかかわる楽しさは？ 老いを生きる本人のつらさは？ 現場で理想とのギャップに煩悶するスタッフの孤独はいつ報われる日がやってくるのか。

ブリコの役割は責任重大！ 現場目線の思想と工夫、明日に踏み出す勇気の後押しを、これからもずっと変わらず、よろしくお願いします。



竹本匡吾（鳥取県・いくのさん家）



介護です。そこには、経済効率もなければ進歩もありません」

介護までが医療のように老いや死を敗北だととらえるようになってはいけない、と三好さんは力説する。敗北ととらえると、介護は意味のない行為になってしまう。彼の考えは、『ブリコラージュ』の創刊当時から続いた連載のタイトル「地下水脈」によく現れている。「専門性などを越えて通底する地下水脈で会うために」とリードが付けられたこの連載コラムは、「子ども」「精神」「身障」といった歴史のある福祉の異分野に、介護はもっと学ばなければならない、という提言に満ちている。

「介護は、人体に関わる領域としては弱いけれども、人生に関わる領域としては深いのです。深さが問われる介護という独自の領域を守ろうと思えば、孤立してはなりません。つながることで介護の独自性を守ろうとする運動だけは、この雑誌で続けてこれたかな、と思っています」

連綿とした生活の流れから 近代を位置づけよう

『ブリコラージュ』が果たしてきた大きな役割の一つが、いいケアを行っている施設を積極的に紹介することだった。なかでも「宅老所」という新しいムーブメントには積極的にコミットしてきた。その象徴のような下村恵美子さんたちの「宅老所よりあい」は今年で17年。ブリコと共に歩んできたことになる。

その下村さんと初めて会ったのは、三好さんが高口光子さんと2人で司会をしたセミナーだった。ひどい特養に勤めているという参加者(下村さん)に対して、「辞めなさい」(三好)、「いや辞めてはいけない」(高口)と、2人の意見が食い違ったというからおもしろい。

「確かにありました。責任は取れないけれど、どんどんやれとけしかけました。悪い施設で無理をして働くよりも、自分で始めたほうがいいぞというメッセージを送ったつもりです。それというのも、マニュアルに頼ることなく、個人の裁量で仕事ができ、目の前ですぐに結果が出る介護のような仕事はほかにはないからです。そのおもしろさを、若い人たちにもっとわかってもらいたいです」

次世代である村瀬孝生さん(第2宅老所よりあい)、竹本匡吾さん(いくのさん家)、伊藤英樹さん(井戸端げんき)とも、地下水脈的な縁を感じるという。

介護の世界に「生活リハビリ」という言葉はすっかり定着した感がある。三好さんはどのような手ごたえを感じているのだろうか。

「老人を落ち着かせ、状態をよくする魔法のようないい方法が現れるのではないかという近代主義の幻想と闘ってきただけです。生活リハビリは、そんな魔法の対極にあります。ちゃんと生活を活性化しようよ、ということですから。人間は生きて死ぬだけ、という基本を見失ってはならない。そんな生活の連綿とした流れの中から、もう一度近代の知識を位置づけ直すべきだと思います」

インタビューア :

東田 勉(ひがしだ つとむ)

1952年鹿児島県生まれ。国学院大学文学部国語学科卒業。コピーライターを経て取材ライターとなる。2005年7月から2007年9月まで、主婦の友社から発行された介護雑誌「ほっとくる」の編集を担当。同誌休刊後、フリーのライター兼編集者として三好春樹著『目からウロコ! まちがいだらけの認知症ケア』(主婦の友社)を編集。医療・福祉・介護分野で、取材や執筆を続けている。

